

平成27年4月23日

## ロータリー「夜霧論」と「船渡し論」について

ロータリーを理解するのは難しいという言葉をよく聞きます。私もロータリーについてまだよく分かっていません。

それで、本日は、ロータリー「夜霧論」と「船渡し論」についてお話をしたいと思います。このロータリー論を提唱されたのは、元宇部ロータリークラブの会員でいらっしゃいました小西俊造さんです。小西さんが吉村さんに出されたお手紙をお借りしましたので、このロータリー論をご披露させていただきます。

小西さんは、1964年に宇部クラブに入会され、1975年—76年の第22代クラブ会長をされました。翌年の1977年—78年に広沢忠彦ガバナーの地区代表幹事をされました。その後山口ロータリークラブの会員になられ、1978年—1984年まで山口大学長をされました。

「ロータリー夜霧論」は、小西さんが学生時代に京都の相国寺の高僧からお聞きになった感銘深かった話で、「悟りというものは、お釈迦様のようにある朝、目を覚ました瞬間に悟りを開いたというようなこともあるが、通常は毎日の修業、勉強を積み重ねることによって次第に身に着いてくるものであり、例えて言えば、夜になると山々の樹々が夜霧に包まれて、次第にしっぼりとしてくるようなものだ」ということでした。ロータリーもこれと同様で、哲学的、宗教的、実践的であるロータリーは一朝一夕に理解できるものではなく、まじめに辛抱強くやっていくうちになんとなく身についてきて、頭だけでなしに肌で感じられるようになり、それは夜霧に包まれてしっぼりぬれてくるのに似ている というものです。夜霧に包まれている場所は、ロータリークラブであり、そこにおいては会員がカップを着ていたのでは、夜霧に包まれません。例会場においてはカップを脱いで仕事も忘れて、一ロータリアンになることが大切という教えだと思います。

もう一つ、小西さんのロータリー論である「船渡し論」というものがあります。お坊さんも牧師さんも人々に法を説き、道を説いて救おうとされますが、その過程において自分自身も安心立命りつめいの境地に近づいているわけであります。渡し船の船頭さんは乗客を向こう岸へ渡すのですが、同時に船頭さん自身も同じ船の一員として乗客と一緒に向こう岸に渡っているのです。向こう岸から引っ張るのではない。みんなと一緒に渡るのである。信仰というものはそういうものである。これをロータリーに当てはめてみますと、「会員はお互いに切磋琢磨しながら指導的立場に立った人も会員を指導しながら何かを会得していくものである」と言っておられます。

この「ロータリー船渡し論」が会長、幹事や委員長さんなど指導的立場にある方に対してとするならば、前者の「ロータリー夜霧論」は新入会員や入会后年数のあまり経っていない方々

に対してと言いえるでしょう。

したがって、入会年数のあまり経っていない方も、ロータリーについていまは分からなくても、例会に出席するうちに少しずつ分かってくると思いますので、ご安心下さい。

本日は小西俊造さんのロータリー論についてお話をいたしました。

ありがとうございました。